

すべての人へ

宮城県仙台市立東華中学校

三年 阿部 北斗

「色覚障害者」。それっぽく言えばそんな感じだろうか。人が「茶色」と言うものを私は「赤色」や「緑色」と言う。人がいい焼き色のついた肉を、鮮やかに輝く刺身を、「美味しそう」と思うものを私はその何倍も劣った色を見て「美味しそう」と思う。人とは少し見えている世界が、色が違って感じる。私は、色覚障害なのだ。

私が色覚障害だと知ったのは小学生の頃で、以前から色の感覚が他と違うことは友人から言われていた。最初はまさかとは思っていたが、眼科に行った際に、自分が色覚障害であることを知った。

正直に言って、私はそれほど気にしなかった。ちよつと見えている世界が違うだけで、世界には目が不自由な人、耳の聞こえない人、もつと難病の人だっている。その人の気持ちを考えれば、私の色覚障害はほとんど人と変わらないものだと思った。

と言いつつも、少しは不安もあった。周りの人はどんな反応をするのだろうか、周りの人が見えている世界と違うとはどういうことか、私は一生「本当の世界」を見ることはできないのか。色覚障害は生まれつきある形質であるため治ることはないと言われた時は、言葉では表せない複雑な気持ちだった。

しかし、そんな私の気持ちは早いうちに晴れていた。友人は皆、私の色覚障害を受け止めてくれたし、全く気にしていないくらいだった。少し寂しい自分もいたが、考えてみれば自然なことである。

中学に入り、美術の授業で苦労することもあったが、美術の先生も色覚障害である私を支えてくださった。美術だけではない。いろんな先生方が私の色覚障害を気に掛けてくださったり、話を聞いてくださったりした。だから深く悩んだことはない。ただ、色覚障害のことを考えれば考えるほど、ある一つの願望が私の頭をよぎる。「みんなが見ている世界の色が見てみたい。」

一生叶わない願いだっただ。一生叶わない願いだと思っていた。

先日、私の父が色覚障害者のための眼鏡があることを教えてくれたのだ。話を聞くと、全国に数台しかない、色覚障害検査のための機械があり、それを仙台でも取り扱っているというのだ。私は早速その検査を受けに行った。そして、様々な検査の後、私はその眼鏡を試しかけてみた。

世界が変わった。専門の人に様々な写真を見せられたが、写真からでもその鮮やかさは身体中に染み渡った。夜空に咲く光の花がこんなに美しく見えたことはあつただろうか、花畑に溢れる無数の花々がこんなに美しいことはあつただろうか、あの焼き色が、あの鮮やかさがこんなに美味しそうに見えたことはあつただろうか。

私はその眼鏡を得てから、いつも見ている世界をみんなと同じように見ることができるようになったのだ。ただ、ずっとかけていられるわけではなく、見たいものがある時だけかけている。慣れが必要らしい。青信号が本当は緑色をしていることを知った

のも、つい最近の話だ。

私が普段見ている世界は他とは違う。でも私にとってそれが普通であり、当たり前の世界なのだ。「普通」とは何か。多数派の意見のことだろうか。私は必ずしもそういうわけではないと思う。人によつて違う「いつも」が「普通」だと私は考える。

世界には目が不自由な人、耳の聞こえない人もつと難病の人だっている。私が色覚障害であることは自ら選んだわけでもないし、他の人が選ぶとしても歩めない道だ。でも、色覚障害者にしか学べないこと、色覚障害者にしか味わえない感動を与えてくれた。

実際、色覚障害にも様々な種類があり、色覚障害である人の割合はそう低くない。気づいていないだけで実は色覚障害者だという人が多く、日本だと五パーセントくらいいるらしい。つまり、二十人いたら一人は色覚障害があるという計算だ。必ずしもこの数値が当てはまるわけではないが、決して特別な割合ではないという点では「普通」と言えるのかもしれない。

私が色覚障害であることは、私にとつてちよつとした誇りでもある。他の人には味わえない鮮やかな色への感動を与えてくれたのだから。他の人が当たり前であることが当たり前ではない人もいることを身を持って教えてくれたのだから。

「色覚障害者」。それっぽく言えばそんな感じだろうか。人が「茶色」と言うものを私は「赤色」や「緑色」と言う。人とは少し見えている世界の色が違って感じる。それが、私なのだ。

作文を書くに当たって

「すべての人へ」というタイトルには、人は個性があるからこそ輝くことができるのに、その個性に偏見を持たれている人、差別されている人へ、私の作文を読んで少しでも勇気を持ってもらいたいという願いが込められています。色覚障害者であるという私の個性は、私にとって誇りであり、私に少しの勇気を与えてくれました。